

開館45周年記念

清荒神と鉄斎

前 期 2020年1月5日(日)～2月9日(日)
後 期 2020年2月16日(日)～3月24日(火)
会 場 鉄斎美術館別館「史料館」
開館時間 9時30分～16時30分
休館日 水曜日・展示替期間



9 聖者舟遊図



13 蓬莱山図

兵庫県宝塚市にある清荒神清澄寺^{きよしこうじんせいちょうじ}は、平安時代中期、宇多天皇の勅願寺として創建された。戦後に真言三宝宗を開き、以来荒神信仰の総本山として知られる一方で、近代文人画の巨匠・富岡鉄斎^{とみおかてっさい}（1836～1924）のコレクションを収蔵する「鉄斎寺」として、今日まで広く親しまれてきた。一見、接点がないように思われる清荒神と鉄斎^{えにし}の縁は、大正時代に遡る。

鉄斎と光浄の面談 清荒神清澄寺第37世法主坂本光浄^{さかもとこうじょう}（1875～1969）は、大正2年（1913）に清澄寺法主に就任する。当時名物といえは宝塚歌劇しかなかった宝塚に、宗教と芸術文化が融合する聖域を築くことを理想としていた。新たに寺宝の書画を蒐集する光浄に対し、同寺信徒総代の辰馬悦叟^{たつしまえっそう}（1835～1920）は「書画道楽は幾人もの作家を愛玩するのは考えもの、只一人の人、然も流行を追わず人格者を選ばなければ駄目、その意味で富岡鉄斎先生をおすすめる」と助言した。兵庫県西宮市で酒造業を営む悦叟は、鉄斎と親交が深く、多くの作品を所有していたことから、同6年、愛蔵の大幅《淡彩山水図》（No.1）を清荒神へ贈った。これを契機に、鉄斎作品に一貫して流れる高潔な精神と豊かな芸術性に心打たれた光浄は、日夜修法に励む傍ら、その蒐集と研究に情熱を注いでいくこととなる。

大正11年、前々年に没した辰馬悦叟の頌徳碑を清荒神境内に建碑する運びとなった。光浄は、同碑篆額の揮毫を鉄斎に依頼すべく、鉄斎と昵懇の間柄にあった辰馬家と高野山管長土宜法龍^{とくきほうりゅう}（1854～1923）の紹介状を携え、同年7月に京都室町一条の鉄斎邸を訪問、ついに念願の面談が実現した。このとき鉄斎は数え87歳、光浄47歳である。鉄斎は、頌徳碑篆額の揮毫を快諾し、「辰馬悦叟君頌徳碑」（原書は所在不明）を書した。これが、清荒神へ寄せられた最初の作品であろう。頌徳碑は、のちの大正15年に建碑、現在も清荒神境内にある。



5 巖栖十八羅漢図



4 弘法大師在唐遊歴図

予てより切望していた鉄斎との対面を果たした光浄の情熱

は一層増し、大正11年に境内に建立した客殿に、鉄斎を迎えることを念願するようになった。鉄斎の芸術と三宝荒神信仰による宗美一体の布教に賛同を寄せた土宜法龍は、この客殿を、鉄斎の名「百鍊」にちなんで「百鍊堂」と命名、掲額を揮毫した。清荒神コレクションと百鍊堂の噂を耳にした鉄斎は、「貴山に拙筆意外の御清賞殆ど者数百幅、宛も書画道場也、拙名百鍊堂書額、故南山雲外僧正（土宜法龍）の筆等評説重々満悦也、秋気清淡の候、拝堂致したく」と書簡（大正12年8月3日付）に記し、清荒神への参詣を望んだ。これを受けた光浄は、鉄斎を迎える準備、打ち合わせ等に京都の鉄斎邸を往来することになる。しかし、鉄斎は高齢のため体調が安定せず、一時延期の末、医師の反対を受け、遂に実現には至らなかった。

贈られた名品 清荒神への招請は叶わなかったが、その後も光浄は鉄斎邸を訪ねた。時には使者を送って書簡とともに宝塚名産の山椒漬、松茸など、四季折々の特産品を贈り、鉄斎を喜ばせた。訪問時の反応について、光浄はのちに次のように語っている。「初め私は、人の忠告によって荒神様の御守とかお札供物などを持参しました。鉄斎翁は丁重に受け取って下さったが、何か家族の人のそぶりに冷たいものを感じましたので、次に行ったとき、失礼かとは思いましたが、台所の皆様へと金封を差し出しました」。

大正12年8月11日、種々の返礼として贈られたのが《古仏龕図》^{こぶつがんず}（No.2）である。龕の中に観音、維摩詰、達磨が坐し、その前に古代中国の青銅器が置かれている。賛には、明の僧株宏^{しゅこう}（雲栖大師）の『竹窓二筆』から古物愛好家の問答を抜

書し、いかに古いものでも、不生不滅の
仏心に比較すれば古いとはいえず、最も
尊ぶべき大切なものは仏心である、と説
いている。贈る先の職業や学識に応じて
主題を選び、制作した鉄斎が光浄に寄せ
た作品は、仏教的な題材はもとより、宗
派・宗教を超えた画題もみられる。特



14 春光庵書

に、光浄の依頼による《弘法大師在唐遊歷図》(No.4)、《巖栖十八羅漢團碁図》(No.5)は自信作で、「図は磊落
と雖も用意慎密の義、御着(眼)相折り候。是れは尋常に非ず、蓋し尊者御鑑察の為に候」と送り状に記してい
ることから、清澄寺法主である光浄への信頼の深さを窺うことができる。このほか、一休と蓮如の逸話を描いた
《聖者問答図》(No.7)、釈迦、観音、孔子、老子が一船に同乗し達磨が楫をとる《聖者舟遊図》(No.9)などが寄
せられている。

清荒神の参道を天に昇っていく龍に見立てて描いたと伝えられる《昇天龍図》(No.8)、鉄斎が自身の米寿を祝
して描き、「知友(光浄)に贈る」と箱書する扇子《山水図・蔬菜図》(No.3)などは、鉄斎が清荒神に親しみを
寄せていたことがわかる。また、京都の鉄斎邸を訪ねた光浄が帰山する際、「暑いからこれで扇いで帰りなされ」
と言ってパナマ草の団扇に竹の図を描いた《竹詩画団扇》(No.22)を与えたというエピソードからは、遠方からの
来訪を労う鉄斎の気配りも窺える。

光浄は、百鍊堂とともに落成した茶室を、鉄斎の妻春子と自身の名から一字ずつ採って「春光庵」と命名し
た。鉄斎に揮毫を依頼した扁額《春光庵書》(No.14)は、一気呵成に走らせた筆あとが軽妙で、老齡を感じさせな
い名品である。

最期の交流 大正13年12月12日、制作を依頼していた書の手本帖が、鉄斎好みの装幀になる三冊本となって完成
し、指物師中島菊斎夫妻を使いとして清荒神に届けられた。多方面から書画揮毫の依頼をうけ、多忙を極めるな
か、満を持して漸く出来上がったのは、鉄斎の東坡癖があらわれた《前赤壁賦書》(No.15)である。最晩年を示す
「九十落款」の本帖は、鉄斎自身も誇る会心の出来で、鉄斎作品を代表する書の傑作といえる。

同月19日、光浄は鉄斎の誕生日を祝し、長寿を祈祷した御供物と鉄斎の好きな牡丹花を使者に持たせて贈っ
た。これを喜んだ鉄斎は、完成間際であった作品に最後の筆を加えた《蓬莱山図》(No.13)を返礼として、使者に
持ち帰らせた。みずみずしい墨色で、清荒神清澄寺の山号「蓬莱山」にちなんで描かれた本図を受け取った光浄
の感激する姿は想像に難くない。

しかし、十数日後の大晦日、鉄斎は数え90歳を目前にして急逝した。現存するなかで最後のものとされる、死
の三日前に書かれた光浄宛の書簡(No.18)には、「一々御礼書を呈さず放置し、多罪慙愧の至り也。何れ冥々の裏
感謝致し申す可きも、まず現世の有難きは今更言う可からざる也」とこれまでの感謝の念が綴られていた。

鉄斎が没するまでのわずか2年半ではあったが、鉄斎から清荒神に寄せられた作品と書簡を通して、両者の交
友を辿ることができる。本展に出品する書画作品は、コレクションの端緒となった《淡彩山水図》のほかは、す
べて直接贈られたものである。近年、認識を新たにした《竹詩画団扇》、鉄斎が米寿祝いの返礼として知友に贈っ
た木版刷りになる《貽笑墨戲帖》(No.24)といった作品資料などを合わせると、現在16点を数えるが、おそらく
これに留まらないであろう。鉄斎美術館の開館45周年を記念し、1世紀以上の歴史を誇る清荒神コレクションの
礎をご覧いただきたい。(細里わか奈)

[主な参考文献]

坂本光浄「鉄斎翁を語る」(『墨美』第150号、1965年)、坂本光聰『世界の鉄斎』(浪速社、1965年)、奥田素子「清
荒神清澄寺開創千百年記念 秋季名品展－清荒神と鉄斎－」展出品目録(鉄斎美術館、1996年)、村越英明「清荒
神清澄寺と鉄斎美術館」(『たからづか』第16号、宝塚市教育委員会、1999年)、森藤光宣「清荒神清澄寺と富岡鉄
斎・荒川豊蔵・森田子龍」(『美術フォーラム21』第19号、醍醐書房、2009年)、柏木知子「富岡鉄斎の交友録」(『目
の眼』第510号、2019年)

《出品目録》

[書 画]

すべて富岡鉄斎筆

番号	名 称	制作年	年齢	寸 法 (縦×横) cm	材質・技法	員 数
1	淡彩山水図	明治11(1878)	43	149.7×68.0	紙本淡彩	1幅
2	古仏龕図	大正12(1923)	88	149.7×39.8	紙本着色	1幅
3	山水図・蔬菜図	大正12(1923)	88	各16.4×49.8	紙本淡彩	2本(扇子)
4	弘法大師在唐遊歴図	大正13(1924)	89	132.9×33.3	紙本淡彩	1幅
5	巖栖十八羅漢図	大正13(1924)	89	144.6×39.2	紙本淡彩	1幅
6	絵島図・煎茶図	大正13(1924)	89	各65.8×20.6	紙本墨画	対幅
7	聖者問答図	大正13(1924)	89	132.6×32.2	紙本淡彩	1幅
8	昇天龍図	大正13(1924)	89	132.2×32.0	紙本墨画	1幅
9	聖者舟遊図	大正13(1924)	89	143.8×39.6	紙本淡彩	1幅
10	瓶菊図	大正13(1924)	89	16.6×53.8	紙本着色	1面(扇面)
11	水墨清趣図	大正13(1924)	89	144.0×39.1	紙本墨画	1幅
12	溪居読書図	大正13(1924)	89	145.1×39.1	紙本淡彩	1幅
13	蓬萊山図	大正13(1924)	89	144.8×39.2	紙本淡彩	1幅
14	春光庵書	大正13(1924)	89	31.8×108.0	紙本墨書	1面
15	前赤壁賦書	大正13(1924)	89	各32.7×264.4	紙本墨書	3帖
16	坂本光浄宛富岡鉄斎書簡	大正13(1924)	89	20.7×100.7	紙本墨書	1通(卷子)
17	坂本光浄宛富岡鉄斎書簡	大正13(1924)	89	22.0×91.0	紙本墨書	1通(卷子)
18	坂本光浄宛富岡鉄斎書簡	大正13(1924)	89	21.5×92.0	紙本墨書	1通(卷子)

[その他]

番号	名 称	作 者	制作年	寸 法 (縦×横×高) cm	員 数
19	俵香合	富岡鉄斎作	明治～大正時代	4.2×5.8×4.2	1合
20	仁者寿字磁印	富岡鉄斎作	明治～大正時代	5.3×5.3×4.7	1顆
21	仿銅器式桐香炉	木 器：中島菊斎作・富岡鉄斎筆 銀火舎：三代泰蔵六作	大正8(1919)	7.8×10.2×7.2	1基
22	竹詩画団扇	富岡鉄斎筆	大正13(1924)	各41.7×32.0	2本のうち
23	富岡鉄斎所用筆			35.0×6.2	1本
24	貽咲墨戯帖(木版刷)	富岡鉄斎画	大正12(1923)	各37.3×27.2	1帖
25	富岡鉄斎宛坂本光浄書簡	坂本光浄筆	大正13(1924)	18.5×225.5	1通

・次回展覧会

開館45周年記念「鉄斎と帝室技芸員の作家たち」

前期：2020年4月5日(日)～5月10日(日)

後期：2020年5月17日(日)～6月21日(日)

会場：鉄斎美術館別館「史料館」

・鉄斎美術館・宝塚市立中央図書館聖光文庫共催企画展

「京都画壇と鉄斎－富岡鉄斎旧蔵資料を中心に－」

2019年12月8日(日)～2020年2月9日(日)

開室時間：午前10時～午後5時

休 館 日：水曜、第2金曜、年末年始(12月29日～1月3日)

会 場：宝塚市立中央図書館聖光文庫《入場無料》

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県宝塚市米谷字清シ1番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://www.kiyoshikojin.or.jp>

令和元年12月24日 印施